

## 平成29年度 若草幼稚園自己評価

若草幼稚園の平成29年度における自己評価は以下のとおりである。

### 1 保育の計画性

各クラス、週日案をしっかりと立て、反省を積み重ねることによって、計画的な保育を展開することができた。立てた週と立てなかった週では、各教員の落ち着きが違ったので、週日案は保育の質を確保することにおいて非常に大きな部分を占めていることがわかった。

特に今年は、計画を軸としたPDCAの実践によって、生活発表会で大きな成果を得られた。どの子どもも自信をもって生き生きと舞台に立つ姿があり、保育者のクラスの個性や発達に応じた計画性とそれに基づく環境の構成の確かさが認められた。今年は、早くから職員会議を数回取り、それぞれのクラスに関するアドバイスをお互いに出しあい、相談し合いながら、進めていったことも大きい。そして何より、全ての保育者が、一人一人の子どもの今を捉え、その心を支えていったことが、実績として評価される。

### 2 保育の在り方、幼児への対応

遊びを中心とする保育が安定して営まれ、園の文化として定着している。子どもの自由と、それ故の厳しさ、そして内側から規範意識を育てていくことの大切さについて、多くの教員が理解して保育に臨んでいる。日常として、子どもの一人一人の心を大切にして寄り添う姿が、自然と各保育者からにじみ出ており、多くの外部参観者に評価された。

預かり保育の子どもが半数までに至り、よりきめ細やかな心の配慮が必要とされるようになった。どの子どもも保護者の深い愛を得ているが、実質問題として満たされていない子が増えている。そうした子どもへの配慮は今まで以上に繊細であることが必要である。午前、午後の保育を担う担任のそれぞれのミーティングを密に行い、双方をつないでいくことによって乗り越えられる部分は大きく、今後も大切にしていきたい。

### 3 教師としての資質や能力・良識・適性

教師の資質として、幼児期の場合は、特に発達理解がその専門性として問われる。発達はいわゆる一般的理論上のものをあてはめるというよりは、それを背景におきながら、各保育者が園の文化や現実の保育を通して体得していくものでもある。その点で、本園は、まだ自覚的でない部分が目立つ。

2、3歳児の保育と年中、年長児の保育は大きく異なる部分があることが、実感としてわかっておらず、保育計画や環境の構成、援助においてズレが大きい場合も少なくなかった。感覚的な世界から意味の世界へと移行するにしたがって、環境の構成や援助は違ってくる。子どもの動きの何を大切にするか、子ども同士のかかわりをどのように捉え、どのように広げ、深めていくか、

そのための環境の構成と言葉がけはどのようなものか、と言う点について、もっと理解を深めていく必要がある。特に、2歳児の保育ができる、できないは、保育者の資質、適性にかかわる。特に、本園では、2歳児の心の在り様、感じ方、学び方をしっかりと支えられる保育者を育てたい。

#### 4 地域の自然や社会とのかかわり

保幼少連携事業において、小学一年生と年長児の合同授業を行った。双方の教員がねらいを共有し、環境の構成や授業展開について共に考えることができた。結果、小学一年生は、自分たちの活動にやりがいや成果を感じ、園児は、就学への期待と安心を得ることができた。また、当日に、双方の教員間で反省会を持つことができ、次年への展望も持つことができた。

すくすくの森の整備では、専門家の手をかりて、里山保全と教育環境の両立を推し進めることができた。

地域連携協議会の役員や、地域の防災、人権イベントに協力していくことを通して、地域に根づいた活動を進めることができた。

#### 5 研修と研究

それぞれの保育者に研究的態度が根つき、保育の精度が上がっている。子どもの実態から仮説をもち、それを実践のなかで検証していく態度が根づいており、それをまとめる力も上がってきている。外部の研修についても、自分なりの意見をもち、考える力が上がってきており、研修に対する積極的な姿勢が見られる。新しいものを取り込み、仮説をもって保育に臨む姿から、さらなる保育の質の向上を見込むことができる。